

# 山月記

中島 敦

せ

隴西ろうさいの李徴りちようは博学才穎さいえい、天宝の末年、若

くして名を虎榜こぼうに連ね、ついで江南尉こうなんいに補せ

られたが、性、狷介けんかい、自ら恃むところ頗すごぶ

る厚く、賤吏せんりに甘んずるを潔いさぎよしとしなか

った。いくばくもなく官を退いた後は、故山こざん、

虢略かくりやくに帰臥きがし、人と交まじわりを絶って、ひた

すら詩作に耽ふけった。下吏となつて長く膝ひざを

俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺のこそうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐おうて苦しくなる。李徴は漸ようやく焦躁しやうそくに駆られて来た。この頃ころからその容貌ようぼうも峭刻しやうこくとなり、肉落ち骨秀ひいで、眼光のみ徒いたずらに炯々けいけいとして、曾かつて進士しんしに登第とうだいした頃の豊頬ほうぎょの美少年おもかげの倂おもかげは、何処どこに求めようもない。数年の後、貧窮ひんきゆうに堪たえず、妻子の衣食のために遂つひに節を屈して、再び東へ赴き、一地方官

吏の職を奉ずることになった。一方、これは、  
己おのれの詩業に半ば絶望したためでもある。曾  
ての同輩は既に遥はるか高位に進み、彼が昔、  
鈍物として齒牙しがにもかけなかつたその連中の  
下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才しゅんさい  
李徴の自尊心を如何いかに傷きずつけたかは、想像に  
難かたくない。彼は快々おうおうとして楽しまず、  
狂悖きやうはいの性は愈々いよいよ抑え難かたくなった。一年の後、公  
用で旅に出、汝水じよすいのほとりに宿った時、遂  
に発狂した。或ある夜半、急に顔色を変えて寝

床から起上ると、何か訳の分らぬことを叫び  
つつそのまま下にとび下りて、闇の中へ  
駈出した。彼は二度と戻って来なかった。  
附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。  
その後李徴がどうなつたかを知る者は、誰  
もなかった。

一えんさん

翌年、監察御史、陳郡の袁儔  
者、勅命を奉じて嶺南に使い、途に商於の  
地に宿つた。次の朝未だ暗い中に出発しよ  
うとしたところ、駅吏が言うことに、これか

ら先の道に人喰虎が出る故、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜しいでしょうと。袁儻は、しかし、供廻りの多勢なのを恃み、馱吏の言葉を斥けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通って行った時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あわや袁儻に躍りかかるかと思えたが、忽ち身を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶないところだった」と

繰返しひたひた呟つぶやくのが聞えた。その声に袁傜は聞き憶おぼえがあつた。驚懼きょうぐの中にも、彼は咄嗟とっさに思いあたつて、叫んだ。「その声は、我が友、李徵子ではないか？」袁傜は李徵と同年に進士の第に登り、友人の少かつた李徵にとつては、最も親しい友であつた。温和な袁傜の性格が、峻峭しゅんしょうな李徵の性情と衝突しなかつたためであらう。

叢の中からは、暫しばらく返辞が無かつた。しのび泣きかと思われる微かすかな声が時々洩もれ

るばかりである。ややあつて、低い声が答え  
た。「如何にも自分は隴西の李徴である」と。

袁慘は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づ

き、懐かしげに久闊を叙した。そして、

何故叢から出て来ないのかと問うた。李徴の

声が答えて言う。自分は今や異類の身となつ

ている。どうして、おめおめと故人の前にあ

さましい姿をさらせようか。かつ又、自分が

姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起させ

るに決っているからだ。しかし、今、凶らず

も故人に遇<sup>あ</sup>うことを得て、愧赧<sup>きたん</sup>の念をも忘れ  
る程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいい  
から、我が醜悪な今の外形を厭<sup>いと</sup>わず、曾て  
君の友李徴であつたこの自分と話を交してく  
れないだろうか。

後で考えれば不思議だつたが、その時、袁

儻は、この超自然の怪異を、実に素直に受容<sup>うけい</sup>  
れて、少しも怪もうとしなかつた。彼は部下  
に命じて行列の進行を停<sup>と</sup>め、自分は叢の

傍<sup>かたわら</sup>に立って、見えざる声と対談した。都

の噂うわさ、旧友の消息、袁傜が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかつた者同志の、あの隔てのない語調で、それ等らが語られた後、袁傜は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを訊たずねた。草中の声は次のように語った。

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほ

とりに泊った夜のこと、一睡してから、ふと眼めを覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の

中から頻りに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。自分は初め眼を信じなかった。次に、

これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分は今までもに見たことがあったから。どうしても夢でないかと悟らねばならなかった時、自分は茫然ぼうぜんとした。そうして懼おそれた。全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判わからぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きて行くのが、我々

生きもののさだめだ。自分は直ぐに死を想うた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない。ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還って来る。そうい

う時には、曾ての日と同じく、人語も操あやつれれば、複雑な思考にも堪え得るし、経書けいしよの章句を誦そらんずることも出来る。その人間の心で、虎としての己おのれの残酷ざんぎやくな行おこないのあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤いきどおろしい。しかし、その人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなって行く。今までは、どうして虎などになつたかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気が付いて見たら、己おれはどうして

以前、人間だったのかと考えていた。これは恐しいことだ。今少し経てば、己おれの中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋うもれて消えて了しまうだろう。ちようど、古い宮殿の礎いしづえが次第に土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い廻り、今日のように途で君と出会っても故人ともと認めることなく、君を裂き喰くろうて何の悔も感じないだろう。一体、獣でも人間でも、もとは何か他ほかのものも

のだったんだろう。初めはそれを憶えているが、次第に忘れて了い、初めから今の形のものであったと思い込んでいるのではないか？

いや、そんな事はどうでもいい。己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。だの

に、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀<sup>かな</sup>しく、切なく思っているだろう！ 己が人間だった記憶のなくなること

を。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上に成った者でなければ。ところで、そうだ。己がすっかり人間でなくなつて了う前に、一つ頼んで置きたいことがある。

袁儻はじめ一行は、息をのんで、叢中そうちゆうの

声の語る不思議に聞入つていた。声は続けて言う。

詩の

(2) 他でもない。自分は元来詩人として名を成す積りでいた。しかも、業未いまだ成らざるに、

この運命に立至った。曾て作るところの詩數  
百篇ぺん、固もとより、まだ世に行われておらぬ。  
遺稿の所在も最早もはや判らなくなつていよう。と  
ころで、その中、今も尚なお記誦きじゆせるものが數  
十ある。これを我が為ために伝録して戴いたきたい  
のだ。何も、これに仍よつて一人前の詩人面づら  
をしたいのではない。作の巧拙は知らず、と  
にかく、産を破り心を狂わせてまで自分が  
生涯しょうがいそれに執着したところのものを、一部  
なりとも後代に伝えないでは、死んでも死に

切れないのだ。

袁傖は部下に命じ、筆を執って叢中の声に

随したがって書きとらせた。李徴の声は叢の中か

ら朗々と響いた。長短凡およそ三十篇、格調高

雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思

わせるものばかりである。しかし、袁傖は感

嘆しながらも漠然ぼくぜんと次のように感じていた。

成程なるほど、作者の素質が第一流に属するもので

あることは疑いない。しかし、このままでは、

第一流の作品となるのには、何処どこか（非常に

微妙な点に於ておい）欠けるところがあるので  
はないか、と。

旧詩を吐き終った李徴の声は、突然調子を  
変え、自らを嘲あざけるか如ごとくに言った。

**(3)** 羞はずかしいことだが、今でも、こんなあさま  
**詩**②

しい身と成り果てた今でも、己おれは、己の詩

集が長安ちやうあん風流人士の机の上に置かれている

様を、夢に見ることがあるのだ。岩窟がんくつの中

に横たわって見る夢にだよ。嗤わらってくれ。

詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男を。

（袁儻は昔の青年李徴の自嘲癖じちようへきを思出しな  
がら、哀しく聞いていた。）そうだ。お笑い  
草ついでに、今の懐おもいを即席の詩に述べて見  
ようか。この虎の中に、まだ、曾ての李徴が  
生きているしるしに。」

袁儻は又下吏に命じてこれを書きとらせた。  
その詩に言う。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 当時声跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘輶氣勢豪

此夕溪山对明月 不成長嘯但成嗥

めーに

ため  
に

時に、残月、光冷ひややかに、白露は地に滋しげ

く、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げて

いた。人々は最早、事の奇異を忘れ、肅然と

して、この詩人の薄倖はくろうを嘆じた。李徴の声

反省

は再び続ける。~~なぜこんな運命になったか~~

(4) 何故なげこんな運命うんめいになったか判らぬと、先刻

は言ったが、しかし、考えようくわえように依よれば、思

論理

求めて 一人ひとりの 心づかい

い当ることが全然ないでもない。人間であつ

た時、己おれは努めて人との交まじわりを避けた。人

々は己を倨傲きやうだ、尊大そんだといつた。実は、

それが殆ど羞恥心しゆうちしんに近いものであることを、

人々は知らなかつた。勿論、曾ての郷党きやうとうの

大かす

鬼才といわれた自分に、自尊心が無かつたと

は云いわない。しかし、それは臆病おくびょうな自尊心

とでもいうべきものであつた。己は詩によつ

て名を成そうと思ひながら、進んで師に就い

たり、求めて詩友と交つて切磋琢磨せつたくまに努めた

りすること<sup>を</sup>しな<sup>な</sup>かつた。か<sup>か</sup>とい<sup>い</sup>つて、又、

己は俗物の間に伍<sup>伍</sup>することも潔<sup>くわ</sup>しとしな

かつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な

羞恥心との所<sup>せ</sup>為<sup>い</sup>である。己<sup>おのれ</sup>の珠<sup>たま</sup>に非<sup>あら</sup>ざるこ

とを惧<sup>おそ</sup>れるが故<sup>ゆえ</sup>に、敢<sup>あえ</sup>て刻苦<sup>くつこ</sup>して磨<sup>みが</sup>こうと

もせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが

故<sup>ゆえ</sup>に、碌<sup>ろくろく</sup>々として瓦<sup>かわら</sup>に伍<sup>伍</sup>することも出来な

かつた。己<sup>おれ</sup>は次第<sup>しだい</sup>に世と離<sup>わか</sup>れ、人と遠<sup>とほ</sup>ざか

り、憤<sup>ふん</sup>悶<sup>もん</sup>と慙<sup>ざん</sup>恚<sup>い</sup>とによつて益<sup>ます</sup>々己<sup>おのれ</sup>の内なる

臆病な自尊心を飼<sup>か</sup>いふとら<sup>ら</sup>せる結<sup>け</sup>果<sup>こ</sup>になつた。

人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当る  
のが、各人の性情だという。己おれの場合、こ  
の尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。

これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つ  
け、果ては、己の外形をかくの如く、内心に  
ふさわしいものに変えて了ったのだ。今思え

ば、全く、己は、己の有もっていた僅わずかばか  
りの才能を空費して了った訳だ。人生は何事

をも為なさぬには余りに長いが、何事かを為す  
には余りに短いなどと口先ばかりの警句を

弄ろうしながら、事實は、才能ひきょうの不足ぼくろを暴露ばくろす

るかも知れないとの卑怯ひきょうな危惧きぐと、刻苦こくこを

厭いとう怠惰たいだとが己おのの凡すべてだったのだ。己おのより

も遥はるかかに乏ひくしい才能才能でありながら、それを専

一ひとに磨こいたがために、堂々どうどうたる詩家しやとなつた

者が幾いくらでもいるのだ。虎こと成り果なりてた今いま、

己おのは漸よくそれそれに氣きが付ついた。それを思おもうと、

己おのは今いまも胸むねを灼やかれるような悔いを感じる。己おの

には最早いちばん人間にんげんとしての生活せいかつは出来できない。たと

え、今いま、己おのが頭あたまの中で、どんな優よれた詩うたを作

つたにしたところ、どういう手段で発表で  
きよう。まして、己の頭は日毎ひごとに虎に近づい  
て行く。どうすればいいのだ。己の空費され  
た過去は？ 己は堪たまらなくなる。そうい  
う時、己は、向うの山の頂の巖いわに上り、空谷くうこく  
に向って吼ほえる。この胸を灼やく悲しみを誰か  
に訴えたいのだ。己は昨夕も、彼処あそこで月に向  
って咆ほえた。誰かにこの苦しみが分つて貰もら  
えないかと。しかし、獣どもは己の声を聞い  
て、唯ただ、懼おそれ、ひれ伏すばかり。山も樹きも

月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮<sup>たけ</sup>つて  
いるとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆  
いても、誰一人己の気持を分ってくれる者は  
ない。ちようど、人間だった頃、己の傷つき  
易<sup>やす</sup>い内心を誰も理解してくれなかつたよう  
に。己の毛皮の濡<sup>ぬ</sup>れたのは、夜露のため<sup>ば</sup>か  
りではない。

漸<sup>あたり</sup>く四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を  
伝って、何処<sup>どこ</sup>からか、暁角<sup>ぎょうかく</sup>が哀しげに響き  
始めた。

(5) 最早、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が)近づいたから、と、李徴の声があった。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼等かれらは未だ虢略かくりやくにいる。固より、己の運命に就いては知る筈はずがない。君が南から帰ったら、己は既に死んだと彼等に告げて貰えないだろうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲しい。厚かましいお願いだが、彼等の孤弱を憐れあわんで、今後とも

道塗どうとに飢凍きとうすることのないように計らって戴けるならば、自分にとって、恩倖おんこう、これに過ぎたるは莫ない。

言終って、叢中から慟哭どうくの音が聞えた。袁もまた涙を泛うかべ、欣よろこんで李徴の意に副そいたい旨むねを答えた。李徴の声はしかし忽たちまち又先刻の自嘲的な調子に戻もどって、言った。

(6) 本当は、先まず、この事の方を先まにお願いすべきだったのだ、己が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己おのれの乏

しい詩業の方を気にかけているような男だから、こんな獣に身を墮すのだ。

そうして、附加つけくわえて言うことに、袁ゑん儻たうが

嶺南からの帰途には決してこの途みちを通らな

いで欲しい、その時には自分が酔っついて

故人ともを認めずに襲いかかるかも知れないから。

又、今別れてから、前方百歩の所にある、あ

の丘に上ったら、此方こちを振りかえって見て貫

いたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛け

よう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪

な姿を示して、以て、再び此処を過ぎて自分  
分に会おうとの気持を君に起させない為であ  
ると。

袁慘は叢に向つて、懇ろに別れの言葉を  
述べ、馬に上つた。叢の中からは、又、堪え  
得ざるが如き悲泣の声が洩れた。袁慘も幾  
度か叢を振返りながら、涙の中に出発した。

一行が丘の上についた時、彼等は、言われ  
た通りに振返つて、先程の林間の草地を眺  
めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上

に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く  
光を失った月を仰いで、二声三声咆哮ほろごうした  
かと思うと、又、元の叢に躍り入って、再び  
その姿を見なかった。